

もう一度、その笑顔を  
見るために

キマリスヴィダール

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

過去に書いていた作品のリメイクです。

書いていたって言っても、途中で忙しくなって書けなくなってしまっただけです。ど。

またお付き合い頂ければ幸いです。

パスペレで活躍してる白鷺さんに双子の妹さんがいたらっていう、なんとも稚拙な設

定  
で  
す。  
。

# 目次

P a s s a g e : 2	P a s s a g e : 1
13	1

# P a s s a g e : 1

どんな人間にだって家族を持つ事が出来る。それは全ての人に与えられた平等な権利。自由に暮らしていく事を保証されている。

ただし、しっかりと仕事でもなんでも、お金を稼ぐ方法を知っていればの話。それと、人生を共に歩んで行く為の相方が必要ですけど。

一般的な所で話すのならば、一企業に務めるようなサラリーマン。銀行員だったり、社会的地位の高い公務員だったり。

世間には、様々な仕事が溢れている。

どの職業も人を求め続けてとどまることを知らない、大きな闇鍋。その中で様々な立場の人間が協力し合って、味わいを深めあつていく。

誰も一人でなんて生きていけない。

人は生きていく限り一人だ。

いぎ煮詰まった大釜の蓋を開けてみれば、そんな答えのないような結果しか残らなかった。

私の家族はお父さんにお母さん、そして姉が一人と私。それと犬が一匹。まったくもって普通の家庭。

ただ、一つ例外はありますけど。

それと言うのは父さんも母さんも、バリバリの芸能人だったって事。

父さんは俳優業です。ここ最近も映画に主演として出演していて、そこに母さんも女優として活躍している。

なんとなく分かるかもしれないけど、2人の馴れ初めはドラマの共演です。冴えない主人公とそのカチカチの有能キャリアウーマンのヒロインを演じた事で、そのまま本当にゴールイン。ドラマも大流行になったらしく、『2人で全てを捨てて駆け落ちするシーン』に憧れてしまい、多くの若者達が行方不明になるといふ事件が多数発生してしまっただったといえます。

——まあ、そんな事はどうだっていいんです。

私は双子の妹として、この家庭に生を受けました。

はい、私には姉がいます。昔はよく一緒に遊んだし、色んなことをして一緒に親に怒られたりもしました。

昨日も楽しかったし、明日もきつと楽しい事が起きる——って小さい頃の私はそう信じていました。

現実には単純じゃないんだって、思い知らされました。

私と姉さんが経験した10回目の誕生日の時。

父さんと母さんは姉さんに、習い事感覚でひとつの事を押し付けようとしていたのです。

それが『子役』、姉さんの人生はここから狂い始めていた。

『今回限りという約束』の、たった一回の仕事。母の出ているドラマ番組を構成する一つのパーツとしての役割を任せられたのです。

その時の姉さんはその誘いをなかなか引き受けようとしませんでした。両親に反抗などした事の無いような姉さんが、初めて断ったのです。それも他でもない、妹である

私の為だけに。

「ごめんなさいお父さん、お母さん。私は聖せ來のお姉さんだから。面倒を見てあげなきゃいけないもの」

その時の私はどう思っていたのかな。

記憶の中で姉さんは何度もそうやって、親の提案から私を守り続けてくれた。きっと素直に嬉しかったはずだ。親の言うことを蹴ってまでも、自分との時間の方が大事だと姉さんは言ったのだ。

でも、父さんも母さんも諦めずに頼み続けて、結果としては姉さんは折れてしまった。その時だけって言っていたはずなのに、そう約束をした筈なのに。

姉さんは事務所に入ってしまっていて、それに伴ってだんだんと多忙な生活になってしまっていて。

私達姉妹の時間も少しずつ、少しずつ、減っていった。

それだけなら仕方ないと思えた。——いや実際、仕方ないなんて思えなかった。本当

はもつと遊んで欲しかったり、色んなお話をしたりしたかった。妹っていうモノは、姉を追い掛けるのが楽しいのだから。それでも、姉さんの迷惑になるのは嫌だったから、ただ我慢していただけ。

でも、小学生になって、中学生になって、高校生になって…。

そんな頃になるともう、私の姉さんはどこか遠いところに行ってしまったている感じがして、とても知っている人とは思えなくなつて。

姉さんは昔、どんな顔をして笑っていたのか。

私にとってはとても大事な事だけど、偶にそれを忘れてしまいそうになってしまう。

最悪の気分で、一日が始まる。気持ちが悪くて、ぐらぐらと揺れ動く視点。

「  
こんな景色も何回目だったかな。見たくも無い光景を見せられて、朝から私のテンションは地面を突き破りそうな程に下がってしまう。」

嫌な、夢。

カーテンを開けば、眩しい陽の光が私の身体を照らしていく。姉さん譲りの、自慢の髪が光を受けて輝きを放つ。

たったそれだけの出来事なのに、なんだか嬉しい気持ちで一杯になる。

時計は午前6時半を指している。また眠くならないうちにベッドから出て、洗面台の鏡で寝癖のチェックを済ませてから朝食の準備を始める。

本来ご飯を作るはずの親は二人ともいない。あの人達はいつも通りの仕事。あの人達の顔も、もう1週間くらいは見えていない気がする。というかそれくらいはざらであることだから、今更気にしたりはしないけど。

お金とかの仕送りはしてくれているし、仮に無い場合でもどうにだってできる。好きじゃない両親の顔を見なくて済むのも、それはそれで最高だし。

ま、それはさておいて。

野菜室からロメインレタスとか、ベーコンとかを適当に取り出す。量もテキトー。レタスは素手で食べやすい大きさに引きちぎって、ベーコンは指の関節くらいの大きさにカットしておく。

ベーコンは油を薄くひいておいたフライパンに投入して焼き色が着いたのを確認し、キッチンペーパーの上に放る。うまく油を吸い取ったら、さっきのレタスと市販のクルトン、自作のドレッシングと一緒にボウルに入れて味が馴染むようによく混ぜる。

皿に盛り付けて、仕上げに粉末チーズとペッパーを振り掛けて完成。お好みで半熟卵でも乗っければさらに良いかもね。

他にも軽く食べられるような食事を用意して食卓に運ぶ。ソーセージにスクランブルエッグ、さっきのシーザーサラダにヨーグルト。加えて日本人の魂である白米とお味噌汁。朝ご飯にしてはそこそこボリュームのあるメニューでは無いだろうか？

これでようやく食事、という時に私の姉さんは今日もその美しい姿を私の前に現した。

私とおそろいのブロンドの長い髪をハーフアップにまとめ、それをいつもの白いリボンで結んだヘアースタイル。今日は普通の学校の日なので、そこにベージュ色の制服を着こなしている。

ああ……！とてもベリービューティフルです、姉さん。すつごくい匂いがします！そんな姉さんは私に向かって、ニコリと笑って一言。

「おはよう、聖來」

「うん、おはよう姉さん」

ありがとうございます、これで今日も頑張れます。

白鷺千聖。

それが、私の姉さんの名前。だから私も白鷺、そこに姉さんの『千聖』から一文字借り受けて『聖來』。

だから、白鷺聖來。

それのおかげかは分からないけど、私と姉さんには類似点があったりする。髪の毛の色とか、背丈とかね。

ま、それはそれ。

今日もこうやって何事も無く挨拶を交わすことが出来るだけで、私には幸せを十分に

感じる事が出来ます。姉さんは今も芸能人として、仕事を続ける傍ら学校にも通っているので、私はまだ眠っている間に仕事で家を出てしまっていたり、一日家に帰ってこれないことも偶にある。

そんな姉さんの負担を少しでも減らすために、親がいなせいで滞ってしまいう家事全般を全て私が引き受けているのです。芸能人として活躍する姉さんの負担に比べれば、これくらいはなんて事ないのです。

「姉さんは先に食べていいよ、私はお弁当作らないといけないから」

「いいえ、聖來がまだ忙しいのなら私も待つているわ。一緒に食べましょう?」

「そっか。うん、分かった。じゃあさっさと作っちゃうから待つてね」

一見、普通の姉妹の会話に見えるだろうけど、私はやっぱり気に入らないところがあります。

それは、姉さんの『顔』です。姉さんは昔の頃——7〜8年くらい前、それこそ姉妹揃って遊んでいた時——は感情豊かで、表情もころころと変わる様な人でした。

でも、芸能界という闇の深い業界が私の姉さんを変えた。

変えられてしまった。

時間の流れは残酷です。共演者とのいざこざを避けるために姉さんは、親の指導によつて仮面——つまりは偽物の顔——を植え付けられてしまつていた。道化を演じる事を小さい姉さんに押し付けたのです。多感な時期をそんな仮面を付けて過ごす事余儀なくされた姉さんの顔が、歪んでいくのは必然のことでした。

幼い私はそれには気づくことが出来ずに、そのまま成長を続けてしまつて。その結果として、私達は家族の筈なのに、いや家族というよりも姉妹なのに、その姉妹の私と話す時にでも。

その仮面を付けて会話をするのです。

仮面の上に現れる笑い顔、怒り顔、哀しみの顔、楽しい時の顔。

どれもこれも姉さんの高度な演技技術によつて、まるで心の底からそう思っているように錯覚させるその仮面。

でも、姉さんの事を一番誰よりも知つていて、誰よりも一番近くにいた私からしてみれば、その顔をしている姉さんの事は。

……正直言つて嫌いです。

どうして私にすら、その仮面が必要なんですか？血の繋がっている貴女のたった一人の妹だつていうのに……！

「聖來？どうしたの、さつきからぼーっとしているわよ？」

「えっ？ああ、うん……大丈夫。ちよつと何作ろうかつて考えてただけだから」

「そうなの？まあ、聖來の作るものは何だつて美味しいから、最近お昼の時間がもつと楽しみになつて来たのよ？」

「あははっ！そう言つてくれると、作つてる私としても嬉しいかなあ」

小さい頃の感情豊かだった姉さんを間近で見えていたおかげがどうかは知らないけど、私は人の気持ちや感情に割と敏感だ。自然とそういうのに気づけるようになっていた。

だからなんとなくだけど、姉さんが仮面の裏で考える事も大体分かったりする。そう、今姉さんが「今日のお弁当何かしら？」つて考えてる事も分かるんだから。

「ふう……。はい完成つと」

二つの色が違う弁当箱に、具材を詰め込んでいく。ほうれん草とベーコンの炒め物だつたり、有り合わせで作つた簡単和風ハンバーグだとか、彩りに問題は無い。余り高カロリーなものとか、脂っこいものを姉さんは余り好まない。あと納豆。

納豆の何がいけないのだろうか！多少癖はあるけど、素早く食べられて且つ美味し

い。芸能人のような多忙な生活には割とびったりだと、ああでも口臭が少しきつくなっ  
ちやうか……。そりゃあダメだよねえ……。

「聖來」

「今日はね、ほうれん草とベーコンのソテー、玉子焼きに和風ハンバーグ」

「まだ何も言っていないわ」

「弁当のコトを知りたそうな顔してた」

「いえ、まあそうだけれど……」

「でしょ？よく見てるんだから、私はさ」

弁当箱をバンダナ位の大きさの布で包んで包装完了。そうしたら、やっと朝ご飯を食  
べるお時間になりました。

「待つててくれてありがとうとー、じゃあ食べよー！」

「ええ、そうしましょう」

「いただきます」

こうやって、私達姉妹の何気ない一日は今日も始まります。こんな日がずっと続けば  
いいのにな。

なーんて考えながら、箸で

## P a s s a g e : 2

さほど強くはない日差しの下、私は姉さんと別れて学校へと向かい始める。

花咲川女子学園は地域では割と偏差値の高い学校で、私の姉さんもそこに通っている。最近校舎を立て替えたお陰なのか、入学者数が増加し続けている進学校です。

そこは普通の学生から、いい所のお嬢様まで。これまでも、幅広い事情を抱えた生徒が自分の学力に物を言わせて入学してきた。

——まあ、姉さんはある程度の学力と知名度のお陰で、推薦によって入学したので違いますけど。当然ですね、姉さんはそこらのお嬢様如きとは比べ物にならない品格つてものがありますからっ。

最初は私もそこを志望していたのだけど、私の学力には見合わないであろう事を見抜いていた。私の学力が追いつかないのではなく、むしろ逆。学校の方が低すぎてなんですけど。その点、羽丘女子学園の方は、私の学力にピッタリだと言えた。

そつちの学校に行っても良かったけれど、やっぱり姉さんと同じ学校に行きたい、という思いの方が強くて心の中ではそう決めていたのだが……。

その思いを話してみると。

「いいえ、それはダメよ。貴方は私よりも勉強が出来るのだから、それを活かしていかなければダメよ？」

……。つて、やっぱり断られてしまい、渋々高校から羽丘に入学する事を決めたのでした

---

つてというのが、今より1年前の話。

今日も通学路の途中で姉さんとは別れて、私と同じ制服を来た生徒がたくさん歩いている坂道を登っていく。実は姉さんには話していないけれど、私は昔頃から低血圧で早起するのは正直とても辛い。その事も姉さんには内緒にしてるけど、これも姉さんの為だと思つて頑張つているのです。褒めて？

今は5月だと言うのにまだ桜が残つていて、少しおかしな気持ちになる。例年通りのこの時期なら、そろそろ蝉がけたたましく鳴き声を響かせる頃だというのに、蝉の1匹も見かけないとは珍しいものだ。まあずっとこのまんまでいいんだけどねー。

あー、まだ春なんだなあ……つて何となく桜を見つめっていると、聞き慣れてしまった喧しい声が背後から聞こえてきた。

「ああっ！やはり君の姿は桜と相性が良いみたいだね。とても……儂く感じるよ！」

「……はあ、薫。ホント今日も朝からうるさいって」

「おや、今日の子猫ちゃんのご機嫌斜めみたいだね？」

『『今日も』ね。あんた私が朝低血圧だって知ってるはずでしょ？』

「ああ、知っているとも。私なりに元気を分け与えたつもりだったのだけど、逆効果になっってしまうとは！」

「このやり取りかれこれ何回目だと思ってるの……？」

うん、十分に伝わってるよ。事実、アンタの周りを見てご覧よ。フアンであろう人がぶっ倒れてるでしょ？ピンクっぽい髪の巨乳の子が倒れているのが見えないかな？

さて、この朝からハイテンション過ぎて喧しい人は瀬田薫さん。演劇部に入っている、という事から分からないけど猫を被っている。正確には、何かしらのキャラを演じて、学校側としては『問題児』の認定をされている二つの意味で有名な人だ。

だが女だ。

それと、私とは幼なじみって奴です。当然の事ながら姉さんとも。私は好きでも嫌い

でも無いって感じだけど、姉さんの薫に対する当たりは相当強いものです。

……一度、私にもあれくらい強く罵るような目で——いいえ、何でもありません。

「それで、ハロハピの方はどうなの？」

「こころの考える事には、いつも驚かされてばかりだよ。だが、やんちやなプリンセスを見守るのも、ナイトである私の勤め……！」

「あーはいはい、おっけーです」

「やっぱりノリが悪いなあ……」

「低血圧だっって言ってるんじゃないさあ……」

唐突に素に戻るな。役者ならちゃんと演じきりなさいっての。

そして、瀬田薫という人物を語る上でもう一つ話すべきポイントがある。

彼女は『ハロー、ハッピーワールド!』というバンドのギターを担当しているのです。さつき薫が言っていた『こころ』というのは、そのバンドのボーカルの人の事だ。私も何回か薫の紹介で会ったことがあるけど、凄く押し強い人だったな……。こう、グイグイ？来る感じの。

何故そうなったか、という経緯は知らないけど、本人が楽しそうにしてるんだからいいんじゃないかな。

そのまま昇降口にて出会った薫と一緒に教室まで向かう途中に、この学校もう一人の『問題児』と遭遇してしまった私の不運を呪いたい。

「あーっ！聖來だー！やつほー！」

「……まためんどくさいのがっ」

「日菜、こんな所で会うなんて……、奇遇だねえ」

「いや、教室ほぼ目の前なんだから奇遇なんかじゃないでしょ……」

「あははは！二人とも朝から元気だね〜」

「日菜もでしょ？」

氷川日菜。

世間一般で言う所の『天才』と呼ばれるような存在です。一度見たものは大抵こなす事が出来たり、参考書も一度見れば二度目は必要ない程に理解出来てしまう程、記憶力がずば抜けていたり、才能溢れる変態。体を動かすにしても、初めての事でも常人の比にならない速度で成長していつてしまう。

そんな彼女は薫とは違う意味で有名人である。その訳は、最近テレビに出演していたお陰で、話題沸騰になりつつあるアイドルバンド『Pastel\*Palettes』のギターを務めているからである。

そしてそのバンドには何を隠そう、私の姉である白鷺千聖も所属しています。妹としては鼻が高いことと言ったら、この上ないのです。一番最初のデビューライブで盛大に失敗してから、みんなが一生懸命頑張ってきたようで、世間の見る目が段々と変わっていった、今となつてはデビューライブで失敗していた事がただのデマだったのでないかというレベルまでに、評価が変わっていききました。

「ほーら日菜、聖來が困ってるでしよ〜?」

「あつ、リサちー!おはよおー!」

「おや、これはこれはクイーン。今日もご機嫌麗しゅう」

「あははは、なにその挨拶っ!」

「おはよ、リサ。助かっちゃったよ……」

「うん、おはよ!やつぱり朝は弱いんだねえ」

3人で駄弁つている所にみんなの良心、今井リサがやって来た。見た目こそイマドキのギャルっぽいんだけど、中身の方は友達想いで、女子力がめちやくちや高くて、面倒見がとつても良いという、言つてしまえばみんなのオカンの存在です。実際、私もものすごく助かっています。

そして、他2人の例に漏れず、リサも『Roselia』というバンドでベースを担当している。どういう因果なのかね、私の周りには楽器やってる人ばかりみたい。

「それよりも、ほら。朝のHRが始まっちゃうよー、早く教室入ったら〜?」

「私に言わないでこいつらに言つてよ」

「一体今日はどんな素晴らしい事が起こるのだろうか……!」

「きつとるんつてする事ばかりだよー!」

教室に入つて、隣の席の友達に挨拶とかしていると、教室の前の扉を開けて担任が入ってくる。今日も号令が掛かり、いつものようにHRが始まっていく。

ところで氷川さんや。いつも思つてたけど『るんつ』つて何さ?

少し時間を飛ばして、お昼休み。

日菜と薫を連れて食堂で昼食を取るのがいつもの流れ。偶にリサだったり、リサの友達の人達さんだったり相席になる事もある。けど、今日は違う日みたい。

「そうだ、日菜」

「ん、なーに?」

「姉さんつてさ、パスパレのみんなという時、どんな感じにしてる?」

「んーと、そーだなあ〜」

「いや、ちよつとアバウト過ぎたね。みんなという時は笑ったりしてる?」

「普通に笑ってる……、とは思わないな」

片手に日替わりメニューの親子丼を持ち、かきこみながら器用にそう答える日菜。やっぱり、どうも姉さんは周りと距離を置きたがっているのかな?

「私と二人で話している時は、いつもと違って当たりが強〜く感じるけどね……」

「あ、そうだね。うん知ってる」

「ああ、一つ一つの言葉が私に突き刺さってくるように。まるで、私との会話を恥ずかしがっているように!」

「ないない、それは無いよ」

まあでも、気兼ねなく喋れているという面では、薫は結構大事な役割を持っている人だつて事を、改めて実感させられるね。

私も弁当の具をつまみながらそう考えてはみるものの、今のまんまじゃあ出口のない思考だと自覚したので、とりあえず頭の中からその事を追い出そうとして、ふと。

「姉さん、いま何してるかなあ……」

いつからか、実際の距離と一緒に心まで離れていってしまった姉さんを思つて、今日も弁当を摘んでいく。